

# 風景構成法における付加物について

— 描き手の体験の語りから —

那 須 秀 行

〔抄 録〕

本研究では、これまであまり研究されてこなかった風景構成法の付加物に関して研究を行った。付加物を描画する段階が風景構成法の中で重要な働きをしているものとなり、検討することが意義のあることと考えたからである。

方法として、大学生11名（男性7名、女性4名）を調査対象に半構造化面接を行い「個々のアイテムを描いていた時の気持ち」「好きなものを描いてといわれたときどのような気持ちであったか」「付加物を描いてみて、描き手の中で風景としてはどのように変化したのか」などは、全ての調査協力者に尋ねることとし、その他の事柄については調査協力者の自由な語り任せに任せた。

今回の調査で得られた描き手の体験の語りからは、付加物の働きは4つのグループに分類できるのではないかと考えられた。そしてただ一方的に課題を与えるだけでは相互交流が生じて来ることはなく、付加という描き手の自由裁量にまかされた段階が存在しうることにより、そのような相互交流が可能ではないのかと考えられた。

キーワード 風景構成法、付加物、イメージ、体験

## 1章 はじめに

### 第1節 風景構成法とは

風景構成法とは、「なぐり描き法」の実践における経験と箱庭療法をヒントに考案された絵画療法の一技法である。

施行方法としては「見守り手」と呼ばれる施行者と、絵を描く「描き手」がおり、まず見守り手は描き手に手渡す画用紙にフリーハンドで枠を引く。これは枠付け法といわれる。枠付けを完了した画用紙とサインペンを描き手に手渡し、一般に「アイテム」と呼ばれる10の項目の名（川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石）と何でも描いてよいという「付加物」を見守り手が1つずつ順番に挙げていき、描き手が描画用紙に1つずつ描いていくという手順で行われる。ある1つのアイテムを描き終わると次のアイテムを教示するという形で順に描いて最終的に1つの風景を描くことが描き手に要求される。

## 第2節 風景構成法の研究

佐々木 (2005) はこれまでに研究された風景構成法の文献を視点別に分類している。これによると、「読み方については構成的・投影的・シンボリックな読み方が考えられ、研究方法については数量的であるか質的であるか、あるいは、臨床事例についての研究かそうでないかによって4種類に分類できる」としている。そして風景構成法の先行研究を「描画プロセス」「描画の展開」を軸に整理している。描画プロセスが研究されているものとしては中井 (1971) や山中 (1996) の研究が主なものとして挙げられ、中井は1枚の描画を例示する形でプロセスについて簡単に示しており、山中 (1996) は描画、彩色プロセスを示すことによって「川と道の取り違え」の現象を記載し、この現象を箱庭療法の適応指針の一つとして考えている。皆藤は風景構成法のプロセスを軸とし、施行する心理臨床家の姿勢についても論じている。また佐々木 (2005) は皆藤 (1988) の研究に対し、「模写ではあるがアイテムが描かれている途中の段階が描かれておりプロセスを考える素材としては興味深い」と述べている。その他の研究としては、佐藤 (1996) の「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み、桑山 (1996) らの「移民と風景構成法」、などの各分野での風景構成法の試みや弘田 (1986) の「風景構成法の基礎的研究-発達の様相を中心に-」など発達の見地から研究したものなど様々な分野で研究が進められている。

## 第3節 風景構成法における付加物

しかし伊志嶺ら (1993) のように人物像などの各アイテムの考察や、皆藤 (1994) の風景構成法における人物像と風景の中の自己像などのようなストーリー性からのアイテムの構成等の研究は見当たらないが、課題画の最後に付け加えられる付加物に関する研究は未だに少ない。伊集院 (1996) は付加物に天象への描画が多いことに注目し、空へと視点を広めていく拡大風景法を編み出したが、これは直接的には付加物に対する研究には至っていない。山中 (1984) はこの付加物の存在に対して「これらの風景画の『装飾物』たちは、患者の自由裁量にまかされているところが、まことによい。『橋』などは明らかに、暗に示されたアイテムであって、あえて『言わぬ』ところが極めて絶妙なのである」と述べている。さらに伊集院 (1996) は「『付加』においては、(残った地面の余白を何かで埋めたり、家や樹や動物の数を増やしたりなどの) 残った空白部分への進出の仕方や、(何も無い空に雲や太陽を描くというような) 新しい項目(アイテム)の創造などにおいても種々の『表象化』の過程が併せ考えられる」としている。描き手の自由裁量にまかされ、かつ天象の付加のようにこれまで見守り手が提示して構成してきた風景を、描き手の意思でまた違った風景にできるような働きが付加物には宿っていると考えることができ、「付加」という名称であるがこの段階が風景構成法の中で重要な働きをしているとみなし、検討することは意味のあることではないだろうか。

川から始まり石で終わるという段階ではアイテムを提示する見守り手に風景構成法の主導権があり、描き手は次に何が来るかそれをどこに配置するか考え、見守り手に見守られている中、提示されたアイテムを言われる通りに枠が描いてある画用紙に「構成」していく。このときの描き手の気持ちというものはどのようなものであるのだろうか。皆藤 (2004) において、皆藤の前で風景構成法を行っている中桐は自身の風景を構成している時の気持ちとして「わたしにとってのあの日のできごとは、『構成する』なんて軽やかに言えるような体験ではなかった。圧倒的にわたしは差し出される側で、いくら探してもわたしの手のなかには微塵の主導権もないようにさえ感じた」と述べている。つまり描き手にとってこのプロセスを提示されている段階というものは主導権がない中で挙げられていくアイテムを構成する苦痛を伴う可能性のあるものであるということが考えられる。

しかし「好きなものを描いてください」と付加の段階では、その立場が逆転するのではない。描き手は何を描いても良く、見守り手は微塵の主導権もないまま描かれていく状態を見守ることになろう。「構成し終わった空間の中で好きなものを描く」という矛盾した状態ではあるが、好きなものを描けるこの瞬間というのは描き手にとって、そして風景構成法にとってどのような働きがあるのだろうか。そしてこの主導権が描き手に移っている状態で彩色段階へと進んでいく。彩色段階では山中 (1984) は「『彩色』段階は、いちおう構成された『風景』を修正し、情動づけ、混沌を最終的に放棄する機会である。(中略) 構成段階では貧しく見えた風景が彩色で豊かさを取り戻すことがある」としている。しかし付加の段階がなく課題画の直後に色を塗ってよいと言われても困惑するのではないだろうか。その意味では付加の段階というのは“課題”から“自由”へ移行するための小休止の意味もあるのではないだろうか。

また皆藤 (1994) は「構成プロセスは作品から描き手のメッセージを読みとろうとする場合、必要不可欠の重要な視点である」と述べている。本研究で取り上げる付加物という存在も単独で存在するものではなくこのプロセスの流れの中で生じるものである。つまりどんな付加物が現れたというだけではなく、描画プロセスの中でこの描き手にとってこの付加物はどのような働きがあったのかという視点で研究をすることが必要であると考えられる。「追加」と認識されている付加物ではあるが、先に述べたように風景を描き手の意思で違ったものにしていく力があり、描き手の自由裁量に任されて、かつ彩色に行くための小休止のような働きをもつ可能性のあると思われる付加物が、描き手の中で、そして風景構成法の中でどのような働きをしているのか本研究では、明らかにしていきたい。

## 2章 方法

### 第1節 対象

A大学に所属し、事前に調査に協力してもらえると許可を得た大学生11名 (男性7名、

女性4名)を調査対象とした。これらの調査協力者は全員風景構成法を体験したことがなく検査者とも初対面であった。施行前に「風景を描いてもらう」ということは伝えてあった。

## 第2節 道具

使用したものはB4サイズの画用紙、16色のクレパス、黒のサインペンであった。慣例的に風景構成法ではA4の用紙が使用されるが山中(1984)は「画用紙の大きさ、クレヨンの色数などにはことさら厳密な標準は設けてない」と述べており、面接時間内で終わらせることのできるサイズを選んでいるようだ。厳密に規定はされておらず、今回の研究の目的は描き手の自由裁量に任されている付加物に注目するものであり、余白が増え付加物が描かれやすくなるのではないかと予想されたことからA4よりも一回り大きいB4を選択した。

## 第3節 手続き

施行した部屋は畳張りの6畳の部屋で窓が1つあり、畳に腰を下ろして、机の上で施行する形であった。机の上には画用紙、サインペン、クレヨン、録音機だけを置いた。調査は机を挟んで対面する形で個別法で実施した。

施行するまえに「これから言うアイテムを描いて1つの風景を創ってもらうこと」「描きたくなかったら途中でやめてもらっていいこと」「そして本研究のためにインタビューを録音してもよいか」ということを伝え、調査協力者の了解を得て実施した。

描画後のインタビューは、半構造化した面接を行った。まず「描いてみてどうだったか」という質問をし、そして川から順に描画のプロセスを振り返り、「個々のアイテムを描いていた時の気持ち」そして「石のアイテムを描いた後に、好きなものを描いてといわれたときどのような気持ちであったか」「実際付加物を描いてみて、描き手の中で風景としてはどのように変化したのか」などは、全ての調査協力者に尋ねることとし、その他の事柄については調査協力者の自由な語りに任せた。

## 第4節 結果の整理

まず録音したインタビューを逐語録におこし、描いていた際の描き手の気持ちに関する語りを付加物も含めたアイテムごとに整理した。また筆者が、描き手の体験を振り返るための作業として逐語録に沿って新たなB4用紙に描き手の風景構成法を川から石までのアイテムをプロセス通りにトレースした。これは筆者が描画プロセスを追体験することで描き手の体験を振り返り、各々のアイテムが描かれた必然性を実際に描き手の立場になって考えるためであった。そしてさらに実際の風景と付加物を加える前のトレースした風景で付加物の有無を見比べ、付加物に関する体験の語りに照らし合わせることで、描き手にとって付加物という段階がどのようなものだったのか、そして実際に描かれた付加物がどのような働きをしているのかを整理した。

以上のような整理を経て、付加物をその働きに注目して4つのグループに分類した。これらは付加物の働きに注目した分類であり、1つの付加物が2つ以上の働きをしたと考えられる場合もあった。

### 3章 結果と考察

付加物の働きに注目した4つのグループとは、「空白部分を埋め風景としてのバランスを保つ付加物」「プロセスが進むにつれてのズレを修正する付加物」「描き手のイメージを記号的に具象化する付加物」「見守り手に自分のイメージを伝える付加物」である。以下にそれぞれの具体例について、完成した風景、筆者がトレースした風景、および付加物に関してのインタビューを提示して考察を加える。

なお被験者11名の付加物の分類は以下のとおりである。〔 〕は描き手が描いた付加物である。

空白部分を埋めバランスを保つ働きの付加物【描き手A (女性22歳)〔太陽・雲〕、描き手B (男性19歳)〔車庫・公園・月・雲〕】

プロセスが進むにつれてのズレを修正する付加物【描き手C (男性22歳)〔山への道・橋〕、描き手D (男性19歳)〔おばあちゃん・親子・黒猫〕、描き手G (女性22歳)〔太陽・雲〕】

描き手のイメージを記号的に具象化する付加物【描き手B (男性19歳)、描き手E (男性23歳)〔空き地・白線・柵〕、描き手H (男性22歳)〔太陽〕、描き手I (23歳女性)〔太陽・魚〕】

見守り手に自分のイメージを伝える付加物【描き手E (男性23歳)、描き手F (男性19歳)〔なし〕、描き手J (男性22歳)〔山に陰〕、描き手K (女性22歳)〔なし〕】

なおインタビューの記述内で「」は描き手の発言、<>は筆者の発言を表す。

#### 第1節 空白部分を埋め風景としてのバランスを保つ付加物

まずは付加物が風景を描くというプロセスの中で構成しきれなかった空白部分を埋めるという働きをしたグループについて検討する

【描き手A】 《太陽、雲を付加したことについて》



図1：描き手Aの風景構成法



図2：筆者がトレースした石までの描画段階

《付加に関するインタビュー》

「描いてる途中からこの辺（右上）に太陽描きたいなって思って」<ここらへんに描きたかったんや>「雲があるところに描こうかなっておもったんだけど、こっちが終わって寂しすぎるからこっちにした」<なるほどね。空間がガーって空いてた感じ？雲は・・・>「雲は太陽があったら雲もいるなって」

Aの描いた風景構成法を見てみると右の世界と左の世界がまるで分離しているように見える。右図の付加を提示する前の段階の風景（筆者によるトレース）を見るとそれは明らかであろう。彼女はインタビューで川を描いたときの気持ちとして「なんか川の大きさがだめ」<ああ、最初川描いたときに、失敗>「ちっちゃくて良かった」と述べ、川を大きく描きすぎたということを語った。そしてプロセスの中で花の提示があるまで一切右の世界には手をつけなかった。花を川の右岸に描いた理由として「(左に描くと) もっとバランス悪くなるから。だったら、川のほうだったら原っぱも欲しいし、花が生えててもいいかなあって」と風景としてのバランスが悪くなるために左の世界には花を描くことができなかったこと、そして右の世界には描けそうだったということを語っている。つまりAのイメージでは川を挟んでの右の世界と左の世界は独立したものであったと考えることができるのではないか。描かれた風景を見てみると左の世界では家、木、人など大きさという視点では非常に気をつけて構成されているのがわかる。そして右の世界に描かれた花を見てみると左の世界では描くことのできないような大きさで描かれているのがわかる。こうしたことから、Aの世界では左の世界と右の世界では分けられていると考えることができる。

ここで空という距離や繋がりに関して無限の空間を持つ場所に存在できる太陽は非常に大きなものであるように筆者は考える。伊集院（1996）は「ある患者は、空と地面を描いた際、『地面はみんなと繋がっている、同じ地面の上で。空もみんなと繋がっている、同じ空の下で。

でも空の方が開けている、どこまでも開けている感じがする。みんなが一つのものに包まれている感じがする。雲があると空が遠い。雲がないと、そんなに距離感はない」と述べたのが印象的であったと述べている。そして空に太陽を付け足したAも何故中心の空白の空間でなく空に描いたのかという問いに対して「ここ(中心)に描いたら、大きさの違いがここ(中心)の空間があることでどうにか誤魔化されているものが壊れるなあって」と述べている。この発言から空間を分ける行為を助けていたのは左右の世界の距離や繋がりを曖昧なものにさせていたであろう中心の空白の空間であると考えることができ、そこに付加物を描きこむことは風景全体のバランスを壊してしまうようなイメージだと考えることができ、この場所には付加物を描くことができなかつたと考える。

Aにとっての太陽は空というすべてと繋がった無限の空間に描くことで分離された空間を繋ぎ1つの世界としてとしてまとめ上げた「橋」としての働きがあったように考えることができるのではないかと。

【描き手B】 《公園、車庫を付加したことについて》



図3：描き手Bの風景構成法



図4：筆者がトレースした石までの描画段階

《付加に関するインタビュー》

「ここ(家の左端の空間)がちょっと寂しいなってのがあって、なんかあるかなって思ったんだけど、何を描きたいとかがなくて、自分の家の近くに公園があったんで公園だったら不自然じゃないだろうっていう。」<なるほどね。これ(花壇)はどう?あってもなくてもいい感じ?>  
「あってもなくても自分としては変わらない・・・けど寂しいなって。この区画(左側の空間)がないから」

Bの場合では、こちらがアイテムを提示する課題画の段階で次になにがくるのか分からないので空白部分を残し進めていった。そして、付加物を教示されたときの気持ちとして「これで終わりなんだっていうのと共に何を描こうかなっていう・・・」「一瞬こうポンって・・・選択

肢がなくなっちゃったから」と発言している。さらに川から石までを描く段階の中で人を描いたときの気持ちを聞いたときに「どこに描こうっていうのと、何をしているのかっていう。歩いているのを描けばいいのか、それともなんか、家の中に入ろうとしているのか、まあなんかやってるのかっていう。あとまた描いてほしいってのが続きそうだったからまた適当に描いて・・・」という発言をしている。このようなことから風景を構成していく中1つ1つを次の教示に対応できるように進めていくプロセスの中で描きたかったイメージを十分に石までの描画の段階では出せなかったのではないかと考えることができる。そして付加物の段階でその十分に出せなかったイメージを空けておいた空白の中にこれでもかという具合に書き加えたのではないか。彼が描いたものは「車庫」「公園」「月」「雲」と多く、見ていた印象としては、非常にたくさんものが描かれたと感じていた。月は後述するが、車庫は車が好きだからという理由で描き、公園は「自分の家の近くに公園があったんで、公園だったら不自然じゃないだろうっていう」と自分の家の近くに公園があったからだと発言している。ここまでの描画のプロセスでは「田んぼがあるのにその近くに家がないのはちょっと不思議かな」や「生き物って人間がいてってなると人間世界に属している生き物って猫か犬になる」等自分の体験からのイメージと描画で描くアイテムを繋げて、描画を進めていったが石までの段階に比べると付加で描いたものは、それ自体が単独で意味を持ち、自由に好きなものを描いているという印象が強い。付加物を描く前の状態を見てみると右の家と左の花畑の間が空き、花畑が風景の中で浮いている印象をうけるのではないだろうか。それを公園や車庫を家と花畑の間に描くことで家と花畑を繋げ、さらに家のイメージや風景も膨らませることができたのではないか。描画プロセスで見守り手は、公園が描かれるまでは、田舎の風景という印象を受けていたのだが、車庫と公園が描かれたことによって印象が変わり、公園に集まってくるような人が他にも住んでいるのだなと思うようになった。見守り手にもそのように印象の変化を与えるということは、公園を描くという行為自体には空間を埋めるという意味以上に家と花畑との間を繋げる橋渡し、そして生活感を出すなどの意味もあったのではないだろうか。

以上2例から空白部分を埋め、絵としてのバランスを保つ働きをしていると思われる付加物を見てきた。まず風景構成法での付加物の段階で空白部分を埋めるということで考えられるのは、プロセス内で構成しきれなかったアイテム同士をつなげ1つの風景として成り立たせる働きがあるように考えられる。Aは空の観点から、Bは地の観点から付加物の段階でアイテムを創造し、描き込み、風景をまとめ上げているのが分かるであろう。それはAでは地上では架けることの難しかった橋の役割、そしてBでは地上での繋がりのほか川から石までの段階で描いたアイテムのイメージを広げる働きをしていることも明らかになったものと考えられた。空白部分をただ埋めるという働きであってもこれらの事例から分かるように付加物は、一つの風景の構成を仕上げる働きの中心を担っているものではないかと考えることができる。今回のBのケースでは地表に空白ができたが風景構成法は見守り手から提示するアイテムの中に空に関す



る課題が無いために山を描いた時点で空の空間ができるがそこに着手する手段がないために空の部分が空白になることが多いと考えられる。伊集院(1996)は「付加の段階で空の部分に手を加え、そこに雲や太陽を描き込む人が多い」と述べ、さらに本論でも述べたように伊集院の患者は「空の方が開けている、どこまでも開けている感じがする。みんなが一つのものに包まれている感じがする。雲があると空が遠い。雲がないと、そんなに距離感はわからない」と述べている。天象の空白部分に描きこまれる付加物が多いのは風景の構成を締めくくるため奥行きも長さにも無限の広がりのある天象に描くのが距離感としての誤魔化しもきき、描くことにより空白を埋め全体的な構成を締めくくるのに一番馴染みやすいからではないかと考えることができるのではないか。

## 第2節 プロセスが進むにつれてのズレを修正する付加物

次に付加物が、プロセスが進んでいくにつれてのアイテム同士のズレを修正する働きをしたグループについて検討する。

### 【描き手C】 《山への道、橋を付加したことについて》



図5：描き手Cの風景構成法



図6：筆者がトレースした石までの描画段階

### 《付加に関するインタビュー》

〈何描いてもいいよって、気持ちの違いみたいなのはあった?〉「ちょっと迷いましたね。」〈迷った?〉「抜けてるところないかなって、で道が」〈うん、迷ったって言ってたけど迷ったってどういう迷いなん?〉「描くとこあるかなっていう」〈はあ、で探して〉「はい」〈うん、やっぱこれ(道)繋がってなかったら嫌やった?〉「そうですね。ここ(山の上)に人を描いてしまったんで。ここ(山の上)とここ(地上)が繋がる要素が欲しかった」〈なるほどね、山のここ(道)を通したかったってのが〉「はい」〈これ通したことで・・・イメージとしては結構変わった?〉「変わりました、変わりました」

Cは最初に筆者が道を提示した段階では道が山の途中で切れ、後に人のアイテムを提示したときに山の上に人を描き、その人に繋がる要素、つまりこの人はどうやって山へ登るのだ(降りるのだ)という考えができ、それを付加の段階で道を付け足すことにより山へ道を通し、行き来できるものとして補ったものと考えることができる。しかし、道を通した山と人が立っている山は違う山である。さらに付加前の道が繋がっていない状態を見ると道が山の途中で切れているというよりも、右側の山が遥か遠くにあり、道の先が見えていないという印象がある。しかしその山に道を付け足すことによって山が左右均等の位置までに引き戻され、右側の山の道から尾根伝いに左の山の頂上に行くことができるようになり立っている人を関連づけられたと考えることができるのではないかと。Cは、この道を通したことで風景のイメージとしては変わったかという質問に対して「変わった」と答えている。この「変わった」イメージはインタビュー中では述べられてはいないものの、遠景にあったであろう山の位置が付加物である道を通すことによって山の上の人の大きさから見て具体的に捉えられる距離であり、人が行くことのできる距離に近づいたからではないだろうか。その点を踏まえ風景全体として見ても遠景というのは無くなり、遠くにあった山を隣の山と同じ列にある近景として収め、遠くまで広がっていた風景を閉鎖的にしたためではないかと考えることができるのではないかと。

【描き手D】 《おばあちゃん、親子、黒猫を付加したことについて》



図7：描き手Dの風景構成法



図8：筆者がトレースした石までの描画段階

《付加に関するインタビュー》

「ちょっとこれ(付加で描かれた左岸の人や黒猫に関して)人のとき・・・人って教示あったと思うし、動物の教示もあったと思うねんけどそのときにはイメージとしてなかった感じ?」  
「なかったですね。こうやって描いてみたらあー道があってって考えたらこんな感じ」  
「人がいたほうがいいかなっていう」  
「人がいたほうがいいかなっていう」

トレースした風景を見てみると家もあり農民もおり田んぼも耕され1つの構成された世界と

しては受け取ることができるものの、川が風景を分断し、右岸と左岸は繋がりが薄いような印象を受ける。それを示すかのように描き手はインタビューで、田を耕している人は左岸の家に住んでいる人なのかという質問には「イメージ的にはこの人は右の見えていないところの家に住んでおり左の家はまた違う人の家だ」と答え左の家と右の農民は関連性はないとしている。そのようになると左の空間が家や木や花はあるものの非常に寂しい感じを受ける。実際にインタビューで付加で人を描いたことについても「これ（人）いなかったら・・・」と「寂しいって」と答えている。皆藤（2004）は人というアイテムについて「このアイテムと第九アイテムの「生き物」は動的な内容がクリアに表現されるアイテムであり、これにより風景が動き始める。」と述べている。Dの中では課題段階では犬も人も孤独で動きがあり生命がある生き物としては存在しきれていなかったのだと考えられる。そして親子連れを描きそれを描いた後に「2人で道歩いているのは寂しいから誰かと会って、道行くおばあちゃんと会って・・・」とおばあちゃんが生み出され、犬の横には黒猫というものが生まれ「出会い」という動きが付加物の段階で生み出されているように考えられるのではないか。彼にとって人と人との交流が人や生命を生かすものでありこの付加物の段階で出会いを描き足すことによりイメージのズレを修正したものと考えられる。

Cの場合ではプロセスが進むにつれてのアイテム同士のズレ、Dの場合で風景全体のイメージのズレを修正するグループについて例示し考察した。皆藤（2004）は「「石」のアイテムで風景全体を見渡す感じが付加アイテムにも続いていく。そうして風景を眺めながら、書き加えたいものや直したいところが現れてくる」と述べている。つまり付加を描く段階で一旦筆を置いてそこで今まで描いた風景を振り返る機会がありそこでズレを認識し、修正していくという過程があるのではないだろうか。課題を提示される段階では風景を構成するという名目でも1つ1つ各アイテムの関連性に気づかず独立して描いているように思う。皆藤（2004）と風景構成法を行った中桐も「「十個のアイテムでひとつの風景を・・・」と言われたけど、わたしにとってそれは結果であって、描いている体験は一つひとつのかかわりがすべてであった。わたしにとってはつねに白紙を描く体験だった」と述べている。しかしこの付加を提示する段階でこれまで独立して描いたであろうアイテムを振り返り、描き手Cのように関連性を強化したり、残りの事例のようにイメージと違ったものができていると認識し、アイテムを増やし構成やイメージを補うといった働きがあるのではないか。

### 第3節 描き手のイメージを記号的に具象化する付加物

付加物が風景を構成する中で生まれてきたイメージを具体的に表象する働きをしたグループについて検討する。

【描き手B】 《月を付加したことについて》



図9：描き手Cの風景構成法



図10：筆者がトレースした石までの描画段階

《付加に関するインタビュー》

「太陽をガンガン描きたい気分ではないって言うか・・・月明かりっていうか・・・うん・・・」<静かな感じ?>「静かな感じ」「最初風景画描いてて、川と山描いたあたりから静かな雰囲気だになってというのは感じたんで夜かなって」

描き手Bにとっては石までのプロセスのときのインタビューの中でも「川と山描いた時点で夜かなって雰囲気だなんて感じてたんで夜だなんて」と発言しており、そして実際として付加物に月が描かれた。Bはインタビュー内でも「静かな」というイメージにこだわっておりそれを具象化する意味で三日月という付加物が現れたと考えることができるのではないだろうか。付加物で三日月を付け足したというよりは川と山を書いた時点、つまり空ができた時点で三日月はすでにイメージとして存在したのではないのだろうか。皆藤（2004）の中で見守り手として中桐が描いた風景構成法を見守っている中、付加物に月と星を描かれた時「月と星を、一気に描いた。ただそこにある、月と星を」と感じ、表現している。まさにBが月を描いたときの見守り手としての筆者の体験がまさに中桐の月が描かれる時を見ていた皆藤と同じ体験であった。そのイメージを補うように雲という付加物が描かれている。Bが雲を描いたのは「なんもないのは寂しいって思って、でもなんだろ・・・別に・・・星空描くのもなんか違うかなって思って、ちょっと曇り空を」と言っている。伊集院（1996）によると、「特に「雲」は安全で、安心や寛ぎを意味するようである。ふわふわと心なごませるものであり、急性期でも抵抗無く描けることがしばしばである」と述べている。インタビューでも「星空描くのもなんか違うかなって思って、ちょっと曇り空を」「人が動いているのがある意味異常」と語っているくらいCの風景に根付いているイメージは「寂しい」というイメージであり、あえて星空を描くのではなく雲を描くことによって寂しいというイメージを表現しているものと考えられる。

【描き手E】 《空き地を付加したことについて》



図11：描き手Eの風景構成法



図12：筆者がトレースした石までの描画段階

《付加に関するインタビュー》

「イメージとしてはこう描いていく上で俺の中のイメージは徐々にこうなんだろ・・・住宅化が進んでいるような」<住宅化が進んでいるような・・・じゃあこっち（左の田のある方）も住宅になっちゃうかもしれないねっていう>「そう、なんで、でこっち（左の田のある方）があえて舗装されて無いて言ったのは自然をあまり壊さずにやってるようなイメージだったんで」

彼は付加物の段階で、右側の左下部分（付加物で空き地が描かれている場所）の付加物を描く前は家であった所を1つ潰し、空き地にした。また描くプロセスの中、田んぼをより力を入れて描いていた。どのような気持ちで描いていたのかという筆者の問いに対して「なんか地元の田舎だからっていうのもある」と答え、<地元にもこんな田んぼがあるのか>という問いに対して「こういう田んぼが・・・今少なくなってそういうものも反映してこっち（右側の住宅地）も少なくなってるというのがあるかもしれない」と答えている。樋口（1993）は「人間には心象風景と眼前の風景の二種類があり、しかも、人間は心象風景の方に高い価値を置いている。すなわち時とともに変化する眼前の風景よりも変化の無い心象風景を本当の風景と思っている。」と述べている。つまりEの中で、川、山、田んぼというプロセスを通っていく中で、樋口の言う心象風景である地元の田舎でのイメージが湧き上がってきたと考えることができるのではないか。しかしながら樋口（1993）の言う変化のない心象風景が地元の田舎であれば変化していく風景を描くのはおかしいとの指摘もあるだろう。しかし筆者とのインタビューからEは変化していつている田舎で生まれ育ったものと考えられ、その変化していつている田舎というものを心象風景として持っていたと考えられる。

そしてその「変化していく、住宅化が進んで行く」というイメージを表すには、家がびっしりと建ち並んでいるよりも、まだ空き地があり、そこに新たに家が建つことを予感させる状態に戻した方が、Eにとって納得のいくものだったのではないだろうか。つまり、家が建ち並ぶ

中にまだ空き地が存在することで、まさに住宅化という「変化の途上」にあることを表したかったのだと考えることができる。

付加物の働きの1つとして描き手にとっての絵全体のイメージを決める働きを担っているものであるということを実例2点挙げ考察した。プロセスを経ていく段階でも1つ1つのアイテムで絵全体のイメージを決めることはもちろん可能ではあるが付加物は描き手の自由裁量の中でそのように全体のイメージを、描き手Bが月を描いて風景を一変させたように、見守り手に主権があり提示してきた石までプロセスの段階までで構成されていた風景をその見守り手が驚くくらいにそのアイテム1つで変えてしまうこともできる。そしてそのアイテムの出現は付加を描く段階のみで湧き上がってくるのではなく、川から始まるプロセスを体験していく中、全体を決定するイメージは大景群で生じてくると考えることができた。皆藤(2004)は「[川]から[道]に到るところで、風景はほぼその構成を現すことになる。風景の骨格が見えてくると言ってもいいだろうか。それはわたしには、クライアントが生きる在りようとして実感される体験であり、<わたし>はこのように生きて、いまこのように在ることを知る体験でもある。」と述べている。まずこの川から道の大景群を描いて風景の骨格が見え、その瞬間この描き手が風景を「自分の生きる世界だ」と実感する。この生きる世界を実感した時に描き手Bのような全体のイメージを決める「静かな」や描き手Eの「開拓されていく」などの漠然とした風景全体のイメージが生まれ、そしてその全体像のイメージの核となる部分を付加の段階でアイテムとして表すのではないだろうか。

#### 第4節 見守り手に自分のイメージを伝える付加物

付加物がプロセス内で伝え切れなかった風景全体のイメージを見守り手に伝えるという働きをしたグループについて検討する。

【描き手E】 《白線と柵を付加したことについて》



図13：描き手Eの風景構成法



図14：筆者がトレースした石までの描画段階

《付加に関するインタビュー》

「これ（白線と柵）で舗装されているとか、ある程度人の手が加わっているとか」<加わっているっていうイメージを・・・>「イメージを相手に持たすっていうか・・・」<相手っているのは？>「まあ見る人っていうか・・・まあ自分もそうだし・・・自分のも表す。そういうもので作ってる、こういうものってやっぱこういう感じだよっていう例えばなんだろう・・・舗装されてるっていうのは自分の中ではこういうイメージなのかなっていう」

描き手Eの場合は、前の章でも述べたようにまず住宅化が進んでいるイメージというものを自分の中で表すために空き地が出てきた。そしてインタビュー中でも「これ（白線）で舗装されているとか、ある程度人の手が加わっているとかのイメージを相手に持たすっていうか・・・」という発言があるように、この住宅化していくイメージを相手に伝える働きとして道路の白線が使われたのではないだろうか。Eは白線を描いたときの気持ちを以下のように語っている。「舗装されてる道と・・・そうでない道ではやっぱ違うだろうし・・・柵とかガードレールなりついてるような所と、ついてないところでは人に対してどの程度住みやすいかみたいなものが違ってくるだろうし、ある程度、自分がこうだったらいいかなっていうのも入ってるかもしれない」この発言では彼の中の「住みやすさ」というイメージを相手に伝える働きを付加物の白線や柵で表したのではないのかと考えることができる。そして絵全体の印象からも奥行きはあるものの視向が2点に別れ、田が平面的であり家が傾いていることがわかる。皆藤（1994）は空中に視点場が漂っている風景に対し描き手の状況対処の力を認めながらも描き手の不安定な内的状態が伝わってくる」と述べている。<sup>(16)</sup>描き手Eが描いた風景に対しても立体的部分統合型として構成され不安定な内的状態が伝わってくるように考えられる。この不安定な構成と内的状態は見守り手を意識しているところが非常に大きいのではないだろうか。描き手の中で風景画を描くときに他者がいるという要因は非常に大きかったのではないかと考えられる。

以上の例は自分のイメージをメッセージとして相手に伝える働きとして付加物があると考えられる事例であった。風景構成法が心理査定よりも心理療法としての目を向けられるようになってから関係性という概念が重要になっていると思われる。皆藤（2004）は風景構成法にコミットする姿勢について「風景構成法のプロセスを描き手とともにするとき、けっしてわかろうとする姿勢ではない。クライアントが描く姿の息づかいとともに在る姿勢である。その体験をとおしてはじめて『理解』が生まれようとする」<sup>(8)</sup>と述べている。風景構成法を描き手とともに体験している中でイメージ上のズレというのは必ずといっていいほど存在するものだとは筆者は考える。そしてこのズレる感じというのは伊集院（1988）のいう水面下の『あつ、そっか』体験<sup>(17)</sup>によって初めて気づき、そして修正されていくものであると考えることができ

る。見守り手がアイテムを提示していく課題画の時には伝わってこなかったイメージが、描き手の自由裁量に任される付加の段階で見守り手自身に気づきが起こるということを事例を提示して述べてきた。課題画の段階では気づくことができず、付加物が描かれ初めて見守り手に気づきが生じるということは描き手が個性や独自性を自由に出すことができる付加物という段階自体に、見守り手に全体のイメージを伝えようとする描き手のメッセージが込められやすいのではないだろうか。

## 第5節 総合考察

今回の研究では風景構成法において、付加物の働きをグループに分け事例を提示し考察してきた。付加物という名前ではあるものの、描き手にとってはただ付け加えるものではなく、それぞれ風景を描くに当たって働きにはバリエーションがあるものの各自意味のある段階だということが示唆されたのではないだろうか。

皆藤(2007)は「風景構成法の目的は描き手と交流することにある」と述べており、風景構成法とは一方的な提示によって生まれるものではなく、このような二者間が交流することによって初めて誕生するものだと考えることができる。そして風景を完成した後のやりとりというもの非常に大事な段階であると考え。この際に描き手は表すことのできなかつたイメージを見守り手に伝えることによって表現し切れなかつたイメージを収めることができ、その際に見守り手にも新しい気づきが生じる。また逆に見守り手が見て受けたイメージを描き手に伝えることにより描き手にイメージが膨らみ風景が広がっていく。ただ一方的に課題を与えるだけではそのような交流は生じてこないのではないだろうか。付加という描き手の自由裁量にまかされた段階が存在しうることによりそのような相互交流が風景構成法で可能になっているものと筆者は考える。

そして描き手が構成された風景の中という限られた空間の中で自分の意思で描くものが付加物という存在である。描き手Aは付加物を描く時の気持ちとして「ブタを描きたかったけど描いてしまうといつもの描いている絵と同じになってしまうから関係ないもの描こうとは思わなかった」と述べている。自由裁量で描かれる付加物をどのように他のアイテムとの関連性の中で収めようとしているのか、それらを考えていくことは描き手によって描かれる風景構成法を理解する上で非常に重要なことだと筆者は考える。

また描き手が付加物を描く瞬間に前後のつながりやこれまでのプロセスの中で表されるという制限はあるものの、何を描くかと無限の可能性がある中からあえてその1つを選びその風景に描くという描き手から伝わる感覚は、まるで面接場面においてクライアントが特別にコミットしている事柄、つまりそれを通してクライアントが世界に開かれていることをセラピストにわずかに垣間見せてくれるような事柄についてを聴く時の感覚に非常に似たものがあると筆者は考える。山中(1978)は多くは趣味という形で開かれている限局した志向性を「窓」とよび、



歴史書について語るクライアントを例に挙げ、「患者の『窓』に合わせて、彼らが興味を示す部分に同調させ関っていくと、そのときどきに彼らの選んでいる『本』がみごとに彼の内界の発達や変容の状態を明瞭に表していることに気付かされる」とし、この窓にコミットしていく必要性を示している。風景構成法における付加物も描き手の世界への関わり方を伝えてくれる「窓」としての特性をもつと言えないだろうか。

## 今後の課題

今後の課題としては、本研究では彩色段階に対してほとんど触れてはこなかった。彩色段階は、付加物と同じく描き手の自由裁量に任せられ、さらに中井(1996)によると「[「彩色」段階は、いちおう構成された「風景」を修正し、情動づけ、混沌を最終的に放棄する機会である」と述べられている。今回研究に協力していただいた調査協力者の中にも彩色に関して言及しているものがあつた。この彩色段階も風景構成法という世界を生み出すためには非常に大事な段階だと考えられ無視することはできないであろう。彩色も描き手の自由裁量に任せられてるが、付加物の段階とはどのような違いが描き手の中であるのだろうか。皆藤(2004)は「素描は、クライアントと心理臨床家の関係および心理臨床のトポスが主体となって進んできたプロセスであり、そこが風景を眺めるわたしの臨床的位置であった。これにたいし彩色は、クライアントと風景との関係および心理臨床のトポスが主体となって進んでいくプロセスである」<sup>(13)</sup>と述べ、素描の段階と彩色の段階では描き手との関係性が違うものであると述べている。彩色と素描、その狭間にある付加物の働きなどまだまだ考える余地はあるように思う。

## 〔参考文献〕

- (1) 弘田洋二(1986) 風景構成法の基礎的研究 発達的な様相を中心に 心理臨床学研究 3, (2), 58-70
- (2) 伊志嶺美津子・河西恵子・千葉智子・櫃田紋子(1994) 風景構成法における臨床的基礎研究Ⅲ 人物像の検討 日本発達心理学会第5回大会論文集
- (3) 伊集院清一(1996) 拡大風景構成法-表象機能と分裂病の表象病理, 雲の描画法, 空・星空の風景, そして地上への回帰 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社, 111-143
- (4) 伊集院静一・中井久夫(1988) 風景構成法-その未来と方向性 臨床精神医学 第17巻第6号, 957-968
- (5) 皆藤章(1994a) 風景構成法の概説 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 3-17
- (6) 皆藤章・中桐万里子(2004c) 風景構成法体験の語り 皆藤章編 風景構成法のときと語り 誠信書房, 53-90
- (7) 皆藤章(1994b) 風景構成法における構成プロセス 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房, 47-

63

- (8) 皆藤章 (2004a) 風景構成法の<方法>に向けて 皆藤章編 風景構成法のとくと語り 誠信書房,1-12
- (9) 皆藤章 (2007) 風景構成法の実際 皆藤章 (編著) よくわかる心理臨床 ミネルヴァ書房,132-137
- (10) 皆藤章 (2004b) 風景構成法の具体と心理臨床 皆藤章編 風景構成法のとくと語り 誠信書房,25-52
- (11) 皆藤章 (1994b) 風景構成法における人物像と風景の中の自己像 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房,64-79
- (12) 桑山紀彦 (1996) 移民と風景構成法 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社,219-236
- (13) 中井久夫 (1971) 描画を通してみた精神障害者 - とくに精神分裂病者における心理的空間の構造 - 芸術療法,37,51
- (14) 佐々木玲仁 (2005) 風景構成法研究の文献展望 京都大学大学院教育学研究科紀要,187-199
- (15) 佐藤文子 (1996) 「集団風景構成法」と「合同風景構成法」の試み 山中康裕編 風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社,144,166
- (16) 山中康裕 (1996) 競技者と風景構成法 山中康裕編 風景構成法に関する二,三の興味ある知見 岩崎学術出版社,183,215
- (17) 山中康裕 (1984) 「風景構成法」事始め 山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法 中井久夫著作集別巻1 岩崎学術出版社,2-32
- (18) 山中康裕 (1978) 思春期内閉 中井久夫・山中康裕編集 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社,17-62

(なす ひでゆき 教育学研究科 臨床心理学専攻 修士課程修了)

(指導:石原 宏 講師)

2008年9月30日受理